# 核兵器のない未来のために

〈令和５年　長崎平和宣言　解説書〉

令和４年度世界平和祈念ポスター・標語展　ポスターの部優秀賞　富田　美夕さん（長崎市立琴海中学校）の作品

長　崎　市

# 長崎平和宣言

「突然、背後から虹のような光が目に映り、強烈な爆風で吹き飛ばされ、道路に叩きつけられました。背中に手を当てると、着ていた物は何もなく、ヌルヌルと焼けただれた皮膚がべっとり付いてきました。３年７か月の病院生活、その内の１年９か月は背中一面大火傷のため、うつ伏せのままで死の淵をさまよいました。私の胸は床擦れで骨まで腐りました。今でも胸は深くえぐり取ったようになり、肋骨の間から心臓の動いているのが見えます。」

これは16歳で被爆し、背中に真っ赤な大火傷を負った①谷口稜曄（すみてる）さんが語った体験です。

1945年８月９日午前11時２分、長崎の上空で炸裂した１発の原子爆弾により、その年のうちに７万４千人の命が奪われました。生き延びた被爆者も、数年後、数十年後に白血病やがんなどを発症し、②放射線の影響による苦しみや不安を今なお抱えています。

谷口さんは６年前にこの世を去りましたが、生前、まさに今の世界を予見したかのような次の言葉を遺しました。

「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」

長期化するウクライナ侵攻の中で、ロシアは核兵器による威嚇を続けています。他の核保有国でも核兵器への依存を強める動きや、核戦力を増強する動きが加速し、核戦争の危機が一段と高まっています。

今、私たちに何が必要なのでしょうか。

「78年前に原子雲の下で人間に何が起こったのか」という原点に立ち返り、「今、核戦争が始まったら、地球に、人類にどんなことが起きるのか」という根源的な問いに向き合うべきです。

今年５月の③Ｇ７広島サミットでは、参加各国リーダーがそろって広島平和記念資料館を訪れ、被爆者と面会し、被爆の実相を知ることの重要性を自らの行動で世界に示しました。また、このサミットの成果文書である④「核軍縮に関するＧ７首脳広島ビジョン」では、「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」ということが再確認されました。

しかし、この広島ビジョンは、核兵器を持つことで自国の安全を守るという⑤「核抑止」を前提としています。核抑止の危うさはロシアだけではありません。核抑止に依存していては、核兵器のない世界を実現することはできません。私たちの安全を本当に守るためには、地球上から核兵器をなくすしかないのです。

核保有国と⑥核の傘の下にいる国のリーダーに訴えます。

今こそ、核抑止への依存からの脱却を勇気を持って決断すべきです。⑦人間を中心に据えた安全保障の考えのもと、対決ではなく対話によって核兵器廃絶への道を着実に歩むよう求めます。



日本政府と国会議員に訴えます。

唯一の戦争被爆国の行動を世界が見つめています。核兵器廃絶への決意を明確に示すために、⑧核兵器禁止条約の第２回締約国会議にオブザーバー参加し、一日も早く条約に署名・批准してください。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、朝鮮半島の非核化、⑨北東アジア非核兵器地帯構想など、この地域の軍縮と緊張緩和に向けた外交努力を求めます。

地球に生きるすべての皆さん、一度立ち止まって、考えてみてください。

被爆者は、思い出すのも辛い自らの被爆体験を語ることで、核兵器がいかに非人道的な兵器であるのかを世界に訴え続けてきました。この訴えこそが、78年間、核兵器を使わせなかった「抑止力」となってきたのではないでしょうか。

その被爆者の平均年齢は、今年85歳を超えました。被爆者がいなくなる時代を迎えようとしている中、この本当の意味での「抑止力」をこれからも持ち続けられるか、そして核兵器を廃絶できるかは、私たち一人ひとりの行動にかかっています。

被爆地を訪れ、核兵器による結末を自分の目で見て、感じてください。そして、世界中で語り継ぐべき人類共通の遺産ともいえる被爆者の体験に耳を傾けてください。

被爆の実相を知ることが、核兵器のない世界への出発点であり、世界を変えていく原動力にもなり得るのです。

私は、両親ともに被爆者である被爆二世です。「長崎を最後の被爆地に」するため、私を含めた次の世代が被爆者の思いをしっかりと受け継ぎ、平和のバトンを未来につないでいきます。

日本政府には、被爆者援護のさらなる充実と一日も早い被爆体験者の救済を強く求めます。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げるとともに、長崎は、広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島をはじめ、平和を希求するすべての人々と連帯し、⑩「平和の文化」を世界中に広め、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2023年（令和５年）８月９日

長崎市長　**鈴　木　史　朗**

# Nagasaki Peace Declaration

"Suddenly a rainbow-like flash of light burst from behind me. A blast of wind knocked me over, slamming me into the road. Touching my back, my clothes were gone and my skin was blistered and slimy, sticking to my fingers. I was in hospital for three years and seven months, hovering between life and death, and one year and nine months of my stay I spent lying on my stomach, my back covered with severe burns. My chest was covered in bedsores, the flesh rotting to the bone. Even now, my chest appears gouged so deeply you can see my heart beating through my ribs."

This is the experience of TANIGUCHI Sumiteru, who sustained crimson-red burns all over his back in the atomic bombing at the age of 16.
The atomic bomb that exploded over Nagasaki at 11:02 on the morning of August 9, 1945, stole the lives of 74,000 people by the end of the year. The *hibakusha* who survived developed leukemia, cancer and other diseases years and decades after the bombing—battle with suffering and anxiety due to the effects of radiation even now.

Mr. Taniguchi passed away six years ago, but before his death he left a message that seemed to foresee the world today: "People appear to be gradually forgetting the suffering of the past. This forgetfulness terrifies me. I fear that forgetfulness will lead to the acceptance of further atomic bombings."

As the invasion of Ukraine drags on, Russia continues to threaten use of nuclear weapons. Other nuclear states are accelerating moves to strengthen their dependence on nuclear weapons or enhance their nuclear capabilities, further increasing the risk of nuclear war.
What must we do right now?
We have to go back to the very beginning, to look again at "What happened to human beings underneath that mushroom cloud 78 years ago?" and address the fundamental question of "What would happen to the Earth and to humankind if a nuclear war were to begin right now?"

At the G7 Hiroshima Summit held in May this year, the leaders of all the participating countries visited the Hiroshima Peace Memorial Museum and met with a *hibakusha*, showing the world through their own actions the importance of knowing the reality of the atomic bombings. Furthermore, the G7 Leaders' Hiroshima Vision on Nuclear Disarmament—one of the summit's outcome documents—reaffirmed that "a nuclear war cannot be won and must never be fought." However, the Hiroshima Vision is predicated on "nuclear deterrence"—nations maintaining their safety by possessing nuclear weapons. Russia is not the only state representing the risk of nuclear deterrence. As long as states are dependent on nuclear deterrence, we cannot realize a world without nuclear weapons. Eliminating nuclear weapons from the face of the Earth is the only way to truly protect our safety.

I hereby appeal to the leaders of nuclear states and countries under the nuclear umbrella:
Now is the time to show courage and make the decision to break free from dependence on nuclear deterrence. I ask that you move steadily along the path to abolishing nuclear weapons through dialogue, not confrontation, based on a concept of security centered on humanity.



I hereby appeal to the Government of Japan and members of the National Diet:
The world is watching the actions of the only country to experience wartime atomic bombings. In order to clearly show Japan's resolve to abolish nuclear weapons, please participate in the Second Meeting of States Parties to the Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons (TPNW) as an observer, and sign and ratify the Treaty as quickly as possible. I also ask that, in addition to firmly maintaining the principle of peace stated in the Japanese Constitution, you engage in diplomatic efforts aimed at disarmament and alleviation of tensions in the region, such as denuclearization of the Korean Peninsula and the Northeast Asia Nuclear-Weapon-Free Zone initiative.

I ask that everyone in the world stops for a moment and thinks:
Despite the pain caused by recalling their atomic bombing experiences, the *hibakusha* have continuously called on the world to recognize the inhumanity of nuclear weapons by recounting their personal ordeals. Surely it is their testimonies that have been a deterrent force preventing the use of nuclear weapons during the past 78 years.
This year, the average age of the *hibakusha* exceeded 85 years. As we near a time when there are no longer any *hibakusha* living, whether we are able to maintain this genuine deterrent force and whether we are able to abolish nuclear weapons are dependent on the actions of each and every individual.

Please visit the atomic bombing sites, see with your own eyes and sense the consequences of nuclear weapons. Please listen to the testimonies of *hibakusha*, a common inheritance of humankind that must continue to be talked about throughout the world.

Knowing the reality of the atomic bombings is the starting point for achieving a world without nuclear weapons, and could also be the driving force for changing the world.
I am a second-generation *hibakusha*; my parents are both *hibakusha*. To ensure that Nagasaki is the last place to suffer an atomic bombing, the next generation of *hibakusha*—including me—will firmly carry on the *hibakusha*'s mission, passing the baton of peace on to future generations.

I strongly call on the Government of Japan to further enhance support for the *hibakusha* as well as provide relief for those who have experienced an atomic bombing as quickly as possible.

In addition to expressing my deepest condolences to those whose lives were taken by the atomic bombs, I declare here that Nagasaki will continue to strive to disseminate a "Culture of Peace" throughout the world as well as realize the abolition of nuclear weapons and permanent world peace, working with not only Hiroshima, Okinawa, and Fukushima—which sustained radiation damage—but all people who desire peace.

SUZUKI Shiro
Mayor of Nagasaki
August 9, 2023

# ことばの解説

## 1　谷口　稜曄（すみてる）

1945（昭和20）年16歳の時、自転車に乗って郵便物を配達中に爆心地から約1.8km地点で被爆。

1955（昭和30）年に被爆者団体「長崎原爆乙女の会（現：長崎原爆青年乙女の会）」の結成に参加。以後、長崎原爆被災者協議会会長や日本被団協代表委員を務めるなど、平和活動に携わり、国内外で核兵器廃絶を訴え、生涯をその活動に捧げました。2017（平成29）年８月死去。

2016長崎国際会議で証言する谷口稜曄氏
（外務省提供）

## 2　放射線の影響

原爆による被害の特質は、大量破壊、大量殺りくが瞬時に、かつ無差別に引き起こされること、放射線による障害がその後も長期間にわたり人々を苦しめることにあります。

原爆による放射線障害は、急性障害と後障害に分けられます。急性障害は大量の放射線を浴びた時に出る症状で、嘔吐（おうと）、下痢、発熱、皮下出血などを発症し、多くの人が死亡しました。後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる症状で、がんや白血病、白内障（はくないしょう）などがあります。1946（昭和21）年初めから、やけどが治ったあとに盛り上がるケロイドという症状が現れました。また、母親の胎内で被爆した胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免（まぬが）れても小頭症（しょうとうしょう）などの症状が現れることがありました。さらに、1950（昭和25）年頃からは、白血病、甲状腺がん、乳がん、肺がんなど様々な病気の発症率が高くなり始めました。

放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、調査や研究が今も続けられています。

## 3　Ｇ７広島サミット

Ｇ７サミット（主要国首脳会議）とは、フランス、米国、英国、ドイツ、日本、イタリア、カナダの７か国及び欧州連合（ＥＵ）の首脳が参加して毎年開催される国際会議です。

2023（令和５）年５月に日本はＧ７議長国として初めて被爆地・広島でサミットを開催しました。

ウクライナ危機が長期化する中で核軍縮が大きなテーマとなった今回のサミットでは、ゲスト国としてウクライナのゼレンスキー大統領も参加しました。Ｇ７などの参加国首脳らは広島平和記念資料館を訪れ、被爆の実相に触れた後に、核軍縮に焦点をあてた初のＧ７首脳文書である「核軍縮に関するＧ７首脳広島ビジョン」が発出されました。

## 4　核軍縮に関するＧ７首脳広島ビジョン（広島ビジョン）

「広島ビジョン」は、核軍縮に焦点を当てた主要７カ国（Ｇ７）首脳による初の共同文書であり、広島・長崎原爆投下後の「77年間に及ぶ核兵器の不使用の記録の重要性」を強調したうえで、ウクライナ情勢を巡りロシアが繰り返す核兵器使用の威嚇を許さないとし、「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」ことを確認しています。

また、核兵器の役割が国を守るための抑止力であるとして、「全ての者にとっての安全が損なわれない形で、現実的で実践的な責任あるアプローチ」で核兵器のない世界を「究極の目標」として関与することを確認しています。

さらに、世界中の指導者や若者の広島、長崎への訪問を促すとしています。

## 5　核抑止

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどまらせようとすることを、核兵器の抑止力といいます。核保有国の多くは効果的な核抑止力を維持しようと、核兵器の能力向上に励み、核兵器がいつでも使える状態に置き、相手への脅しを続けています。しかし、この抑止力が失敗したとき、あるいは事件や事故が起きた時、甚大な被害がもたらされる危険性があります。

## 6　核の傘の下にいる国

日本や韓国、ＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）に加盟する非核保有国は、いずれも核兵器は保有していませんが、アメリカの持つ核兵器の抑止力に依存している国々です。これらの国々を核の傘の下にいる国と呼んでいます。

これに対し、核兵器の抑止力に頼らない方法で国の安全を保障しようとする考え方もあります。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯構想（９で解説）を提唱しています。

## 7　人間を中心に据えた安全保障（人間の安全保障）

人間の安全保障とは、人間一人ひとりに着目し、生存・生活・尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人々を守り、それぞれの持つ豊かな可能性を実現するために、保護と能力強化を通じて持続可能な個人の自立と社会づくりを促す考え方です。

東西冷戦が終わった1990年代、環境破壊を含めて一人ひとりの人間への脅威を考える「人間の安全保障」という考え方が生まれました。

そして、国連開発計画（ＵＮＤＰ）が出した1994（平成６）年の人間開発報告書「人間の安全保障の新次元」で初めてこの概念が公に使われました。

以後、様々な国際会議でも取り上げられるようになり、「人間の安全保障」は地球規模の課題に取り組む上での重要な概念として、国際社会の認識が深まっています。

## 8　核兵器禁止条約

核兵器は一旦使用されれば、取返しのつかない甚大な被害を人間や環境に与えます。それは戦争での使用だけでなく、核兵器が存在する限り、誤って使われたり、テロなどに使われたりする危険性があります。核不拡散条約（ＮＰＴ）で約束された核軍縮が進まない状況に不満を持つ国々の間で、核兵器を法的に禁止しようとする動きが、2010（平成22）年頃から強まりました。

そのような核兵器を持たない国々の主導のもと、三度にわたる核兵器の非人道性を考える国際会議の開催などを経て、2017（平成29）年７月、国連加盟国の６割を超える122か国・地域が賛成し、核兵器禁止条約が採択されました。

条約の前文には「被爆者の苦しみと被害を深く心に留める」とあります。被爆者の「私たちの経験を、もう、誰にもさせたくない」という願いを国際社会がしっかりと受けとめました。

しかし、採択されただけでは、条約は力を持ちません。本当に力を持つためには、それぞれの国の議会等が国内法にしたがって条約を認め、締結する意志を最終的に決定しなければなりません。これを「批准」といいます。

2020（令和２）年10月24日、批准した国が発効要件の50か国に達し、その90日後の2021（令和３）年１月22日に発効（国際法として効力を持つこと）しました。

# ことばの解説

なお、条約は締約国（条約に正式に入った国）らが話し合う会議を定期的に開催することを定めています。第１回締約国会議は2022（令和４）年６月にオーストリア・ウィーン市で開催され、核兵器廃絶への決意を示す「宣言」と、条約の実現に向けた「行動計画」が採択されました。第２回締約国会議は2023（令和５）年11月27日～12月１日にアメリカ・ニューヨーク市で開催予定です。

## 9　北東アジア非核兵器地帯構想

地域の国々が条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」といいます。

条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることで、核兵器の役割を減らし、核保有国が核兵器を開発したり、保有したりする動機をなくしていくことにもつながります。

地球の南半球は、1967（昭和42）年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか４つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器条約）によりすでに陸地のほとんどが非核化されています。

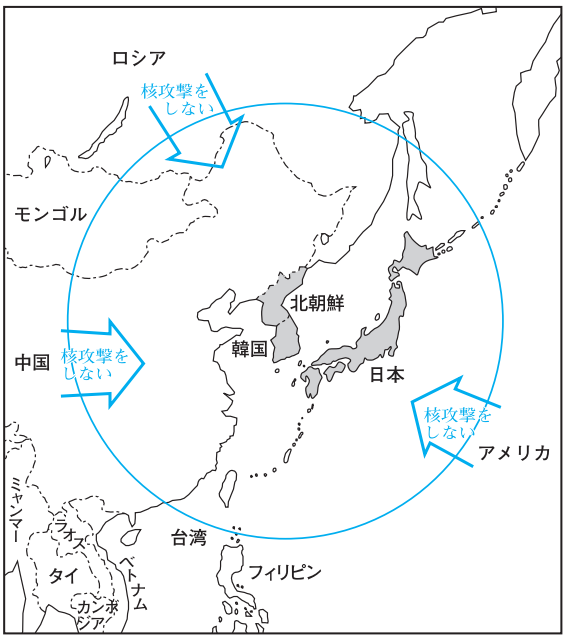
北半球でも、1998（平成10）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009（平成21）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効しています。

「北東アジア非核兵器地帯」には、日本と韓国と北朝鮮の３か国を「非核兵器地帯」にしようとするものなどがあります。

条約が実効力を持つためには、３か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国（アメリカ、ロシア、中国）が、３か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

「朝鮮半島の完全な非核化」が明記された2018（平成30）年の米朝共同声明などを活かしつつ、地域国間の信頼醸成を図り、北東アジア全体の平和を実現するために日本政府が果たすべき役割は大きいといえます。

北東アジア非核兵器地帯構想




☞世界の非核兵器地帯はこちら

## 10　平和の文化

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）が提唱した平和を構築するための考え方のひとつです。その理念は、ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と明記されています。

世界には多様な文化や生活様式などがあります。こうした違いが分断を生み、それを力で解決する「戦争の文化」ではなく、相手の立場に立って話し合ったり交流したりしながら、お互いの理解を深め、信頼を築いていく「平和の文化」を育てることが大切です。

平和の文化

長崎市「平和の文化」ロゴマーク

# 1945年８月９日、午前11時２分

1945（昭和20）年８月６日午前８時15分、広島に人類史上初めての原子爆弾が投下されました。その３日後の８月９日午前11時２分、長崎の上空で２発目の原子爆弾がさく裂しました。

この爆弾は、広島に投下されたウラン235を原料としたものと異なり、プルトニウム239を原料にした、より強力な原子爆弾でした。

爆発により、巨大な火の球が現れ、「太陽が落ちた！」と思うほどでした。火の球は太陽の100倍もの明るさで、中心部分は数百万度であったと推定されています。また、強烈な**熱線**、猛烈な**爆風**、ぼう大な**放射線**を放出し、爆心地を中心とした広範囲を一瞬のうちに襲いました。

溶けた６本の瓶
（長崎原爆資料館所蔵）

**熱線**は、爆心地では地表の表面温度が3,000～4,000度に達しました。強烈な熱線によって焼かれた人々は重度の火傷を負い、多くの人が亡くなりました。また、その後に発生した火災も被害を大きくしました。

**爆風（衝撃波）**は、１キロメートル離れた所で秒速160メートルに達し、分厚い鉄筋コンクリート造りの建物以外はすべて壊しました。爆心地から２キロメートル離れた所でも巨大な台風なみの秒速60メートルの強い風でした。

このため爆心地帯となった浦上地域の学校、病院、工場は壊れ、そこで働いていた多くの職員や生徒、動員されていた学生のほとんどが亡くなりました。

**放射線**は、人の身体に入り、いろいろな細胞を壊します。傷つけられた程度は身体に受けた放射線の量によって異なりますが、見た目は無傷であっても放射線を受けたために亡くなった人たちがたくさんいます。また、生きのびた人でも時がたつにつれてさまざまな病気（白内障・白血病・ガンなど）の症状が現れ、今も後障害に苦しみ続けています。

このように、原子爆弾は、多くの人たちの生命を奪い、家族を失わせ、まちを破壊し尽くしただけでなく、生きのびた人の心と体に、深い傷を刻み込みました。

**被害状況（1945年12月末までの推定）**

※当時の推定人口約24万人（1945年５月31日時点の配給人口）

| | |
|---|---|
| 死者 | 73,884人 |
| 負傷者 | 74,909人 |

原爆資料保存委員会報告（昭和25年７月発表）

**長崎型原爆（ファットマン）**

長崎に投下された原爆は、長さ3.25メートル、直径1.52メートル、重さ4.5トンあり、その形状からファットマンと呼ばれていました。

爆発の際のエネルギーの内訳は、爆風が約50％、熱線が約35％、放射線が約15％で、これらが複雑に絡み合って長崎のまちに大きな被害を引き起こしました。

長崎型原爆の原寸大模型
（長崎原爆資料館にて展示）

# あの日を物語る被爆建造物

原爆資料館の周辺には、原爆による被害を今に伝える建造物などがたくさんあります。お父さんやお母さん、友達といっしょに、ゆっくりと歩いてみませんか？

※爆心地及び ❹ ❻ ❽ ⓭ は、平成28年10月3日、国の文化財に指定されました。

## ❶ 浦上天主堂遺壁

原子爆弾で無惨に崩れた、浦上天主堂の聖堂の南側遺壁。その一部を移築したものです。

## ❷ 被爆当時の地層

原爆で壊れた家の瓦やレンガ、熱でとけたガラスなどが、今でも埋まっています。

## ❸ 長崎原爆資料館

1,500点以上の被爆資料などを展示している常設展示室や約28,000冊を収蔵する図書室があります。

## ❹ 山王神社二の鳥居

爆心地から約800mのところにあり、原爆の爆風を受けながらも、鳥居の片方だけが奇跡的に倒壊を免れました。柱の表面に彫られた奉納者の名前は、熱線の影響で表面が剥離しています。

## ❺ 山王神社大クス

原爆の生き証人でもある、被爆した大クス。無惨な傷跡を残していますが、今でもしっかりと根を張っています。

## ❻ 旧長崎医科大学門柱

爆心地から600mのところにあった長崎医科大学。爆風のすさまじさで、正門の門柱が傾いてしまいました。

## ❼ 被爆した聖像

浦上天主堂の正面入口付近に安置されています。

## ❽ 浦上天主堂旧鐘楼

原爆で崩壊した浦上天主堂の鐘楼のひとつが、今も原爆のすさまじさを物語っています。

## ❾ 如己堂・永井隆記念館

永井隆博士が住んでいた、2畳1間の家。隣の記念館には、博士の遺品や写真などが展示されています。

## ❿ 山里小学校防空ごう跡

小学校の崖に掘られた防空ごうの中で、負傷した多くの人々が亡くなりました。

## ⓫ 浦上刑務支所遺壁

破壊された長崎刑務所浦上刑務支所の遺壁。

## ⓬ 長崎市原子爆弾無縁死没者追悼祈念堂

原爆死没者の無縁遺骨などが安置されています。

## ⓭ 旧城山国民学校校舎

原爆で破壊された城山国民学校（現城山小学校）の校舎の一部。原爆の悲惨さを物語る写真などが展示されています。

# 長 崎 市 民 平 和 憲 章

私たちのまち長崎は、古くから海外文化の窓口として発展し、諸外国との交流を通じて豊かな文化をはぐくんできました。

第二次世界大戦の末期、昭和20年（1945年）８月９日、長崎は原子爆弾によって大きな被害を受けました。私たちは、過去の戦争を深く反省し、原爆被爆の悲惨さと、今なお続く被爆者の苦しみを忘れることなく、長崎を最後の被爆地にしなければなりません。

世界の恒久平和は、人類共通の願いです。

私たち長崎市民は、日本国憲法に掲げられた平和希求の精神に基づき、民主主義と平和で安全な市民生活を守り、世界平和実現のために努力することを誓い、長崎市制施行100周年に当たり、ここに長崎市民平和憲章を定めます。

1　私たちは、お互いの人権を尊重し、差別のない思いやりにあふれた明るい社会づくりに努めます。

1　私たちは、次代を担う子供たちに、戦争の恐ろしさを原爆被爆の体験とともに語り伝え、平和に関する教育の充実に努めます。

1　私たちは、国際文化都市として世界の人々との交流を深めながら、国連並びに世界の各都市と連帯して人類の繁栄と福祉の向上に努めます。

1　私たちは、核兵器をつくらず、持たず、持ちこませずの非核三原則を守り、国に対してもこの原則の厳守を求め、世界の平和・軍縮の推進に努めます。

1　私たちは、原爆被爆都市の使命として、核兵器の脅威を世界に訴え、世界の人々と力を合わせて核兵器の廃絶に努めます。

私たち長崎市民は、この憲章の理念達成のため平和施策を実践することを決意し、これを国の内外に向けて宣言します。

平成元年３月27日　長崎市議会議決

令和５年 長崎平和宣言 解説書
発 行 年 月　令和５年８月
編集・発行　長 崎 市 平 和 推 進 課
〒852-8117
長崎市平野町７－８
TEL 095－844－9923
FAX 095－846－5170
E-mail heiwa@city.nagasaki.lg.jp